第398号（令和４年12月１日㈭発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

南無阿弥陀仏

無意味なことばで　つづられた
千万言の　詩よりも
こころしずまる　一言が
はるかに　とうとく美しい
「ダンマパダ」一〇一
京都女子大学『聖典』一〇七頁

能力値カンストの転生魔族が魔王もろとも無双されて転生ライフ終了からの往生ライフ

法学部准教授　西　義　人

自分はどうやら転生者らしい。といっても前世の記憶は一切ない。ならばどうして転生したと言えるのか。それは後で説明する。

◇　◇

転生者は能力値をチェックすることに決まっている。早速やってみよう。

無明煩悩しげくして塵数のごとく遍満す（正像末和讃）

「無明煩悩（イグノランス）」の能力値が振り切れて測定不能。これまで一般人として普通に生きてきたつもりだったが、そうではなかったようだ。

つねに魔王のためにしかも僕使となりて（往生要集）

この世界の頂点には無明煩悩を極めし魔王波旬（パピーヤス）が君臨しているという。自分はその眷属、つまり魔族だったのだ。ちなみに無明煩悩とは万物を意のままにせんとする根源的精神力のことだ。

魔族はその能力値に裏付けられた数々の強力なスキルを所有する。

「貪欲（グリード）」何物にも満たされることのない虚無の深淵。ひとたび飲み込まれれば黄金でさえたちまち輝きを失う。たとえば推しのライブに行けるだけでこの上なく幸せだったはずが、次第に前方のブロックでなければ満足できなくなり、チケット確保のためなら道徳心の放棄もためらわず、条件次第では最前ブロックの物理的な奪取にすら及ぶ。

「瞋恚（アンガー）」世界はかくあるべしと断じて省みない硬直の意志。己を阻むものに直面すればマグマめいた破壊力を噴出する。たとえば平常時は周囲の流れに合わせて道を歩くことに何の抵抗もないが、少しでも急いでいると前方にいる者たちを排除したい衝動にかられ、条件次第では物理的な排除にすら及ぶ。

これらのスキルを発動させながら闇の中をさまよう。それが魔族だ。

◇　◇

しかし衝撃的な事実が発覚する。魔王はすでに敗北しているというのだ。

魔王を降（くだ）したのはシャーキャムニ・ブッダ。太古の昔から幾度もこの地上に現れ苦悩する生類を救済してきた伝説的聖者の称号を継承する者だ。

ブッダの基本スキルのひとつは「智慧（ウィズダム）」。直撃すれば、無明煩悩の正体が愚かさであることを理解させられ、どれほどの無明煩悩であっても完全に消滅させられてしまう。

ときに魔波旬、その眷属八十億衆と、前後に囲繞して仏所に往至せしむ。到りをはりて、接足して世尊を頂礼したてまつる。（化身土文類）

力の源たる無明煩悩を失った魔王は眷属とともにブッダの足下にひれ伏した。およそ二五〇〇年も前のことだ。

シャーキャムニ・ブッダが地上から姿を消した後もその智慧は崇拝者たちに継承され、魔王の残党狩りのごとく説法の雨を降らせた。

この貪瞋の火をほしいままにすれば、自損し他人を損じ、長く無明の海に没して、木に遇ふこと永く縁なし。（般舟讃）

ブッダ崇拝者たちが説くように、貪欲・瞋恚の発動に激しい副作用が伴うのは確かだ。孤立、虚脱、恐怖、懲罰、闘諍、そして死。魔族でもそれらが苦であることに変わりはない。智慧はそこを揺さぶってくる。

とはいえ、シャーキャムニ・ブッダの智慧の影響力も長い時を経て摩耗しつつあり、遠くない未来に魔族が復興するのではとも予見されていた。

◇　◇

しかしその予見は打ち砕かれることとなる。

自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。（観経疏）

そもそも転生とは生を終える時点で残存している無明煩悩のエネルギーによってもたらされるものだ。そしてその行先はいずこともしれない。勇者や令嬢に転生するとは決まっておらず、前世の記憶が残るわけでもない。ただ確かなことは、今こうして貪欲・瞋恚を発動しているということが、無明煩悩のエネルギーに押し流され果てしない転生を繰り返してきた証拠ということだ。

その無明煩悩を完全に消滅させ、転生を終わらせるブッダがこの時代にも存在していたのだ。その名はアミター・ブッダ。

かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑なく慮りなく、かの願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず。（同）

アミター・ブッダは基本スキル「慈悲（コンパッション）」を発動して苦悩する生類をロックオンし、智慧を照射する。これはすべてのブッダに共通することだ。アミター・ブッダのやばさはその固有スキルにある。

「無量（イメジャブル）」スキルの効果範囲・効果時間が無限になる。

「無碍（アンヒンダド）」スキルの回避・防御・解除が一切不可能になる。

無茶苦茶だ。チートどころではない。このスキルを「俺、何かしちゃいましたか？」などとわざとらしく謙遜することもなく、ただあるがままに発動し続けるのだ。

南無阿弥陀仏をとなふれば　他化天の大魔王　釈迦牟尼仏のみまへにて　まもらんとこそちかひしか（浄土和讃）

あの魔王もアミター・ブッダの名を聞けば忠誠を誓うよりほかになすすべがなかったのである。

◇　◇

摂はものの逃ぐるを追はへとるなり。（浄土和讃左訓）

そんな相手に自分がかなうはずもなく、アミター・ブッダへのあらゆる抵抗は無効化され、転生の根は絶たれた。

「凡夫」といふは、無明煩悩われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず（一念多念文意）

この生が終わるまで無明煩悩は残り貪欲・瞋恚の発動も続くが、恐れることも開き直ることもない。魔族でありながらすでにアミター・ブッダの眷属なのだから。

無礙光仏のひかりの御こころにをさめとりたまふがゆゑに、かならず安楽浄土へいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覚の華に化生して大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり。（同）

この生の終わりには、行先の知れない転生ではなく、アミター・ブッダの世界に直行する「往生」が待っている。そしてアミター・ブッダと完全に同じスキルのブッダへとクラスチェンジするのだ。チートどころではない。

京女への通学路　いまむかし

⑥1963年頃のＢ校舎建設予定地

写真の右隅に見える下り坂、二つの石灯籠に挟まれた参道、その奥にある急な石段、これらは、道が舗装されていることを除けば、現在と変わりがありません。もうおわかりですね。いまでは朝夕、そして教室間の移動において、最もにぎわう場所の一角です。六十年前、その場所には門柱もなく、閑散としていました。看板には「家政学部建設用地」と書かれています。

建設予定地の奥には、かつて京都府皇典講究分所（京都国学院）がありました。一九五一年、本学園はその敷地と校舎を購入し、「日吉校舎」と名付けました。現在の京女高の校舎が完成する一九六二年までの十年間、高校の教室として使用されました。生徒たちからは「京女の孤島」と呼ばれていたようです。

その間に家政学部の校舎として各種実験室を備えた第一四校舎が、今の学生会館のところに建てられました。京女高の校舎が完成すると日吉校舎の取壊しが始まり、伐木され、広い敷地が造成されました。そして一九六四年、床面積一万一〇〇〇平方メートルという大きな校舎が建てられました。それが現在のＢ校舎です。

この場所は風致地区に指定されています。もうすぐ築後六十年、されど大きな校舎に建て替えることはできません。ここに免震補強をおこない、長く使い続けることを選んだ所以があるようです。

（史学科・坂口満宏）

澪標

本学の建学の精神である、浄土真宗の教えを顕（あきら）かにされた親鸞聖人は、弘長二年十一月二十八日、九十歳で阿弥陀仏の浄土へ往生された。現在の暦に換算すると、一二六三年一月十六日のことである。その場所は、現在の御池通り柳馬場上る付近と考えられている。

親鸞の遺体は鳥辺野の南辺りで火葬された。本学のキャンパス周辺である。学術的にその場所を特定することは難しいが、本学の北にある大谷本廟に、親鸞の荼毘所跡が伝えられている。

親鸞の命日に合わせ、浄土真宗寺院や門信徒の家庭では「報恩講」が営まれる。浄土真宗において最も大切にされる仏事で、親鸞を偲び、それを通して阿弥陀仏の教えを聞く。本願寺では例年一月九日から十六日まで、七昼夜八日間にわたって勤修される。学生の皆さんもぜひお参りしてほしい。

ちなみに本願寺に近い京都近隣では、本願寺に先立って報恩講を勤めて、一月には本願寺にお参りする。京都女子学園でも十一月に「学園報恩講」を行っている。

報恩とは感謝の意であるが、さらに言えば「阿弥陀仏のおかげで」という意味である。私たちは他者から自己にかけられた願いに鈍感である。阿弥陀仏から大切に思われ心配されている自己であることを聞くつどい（講）を大切にしたい。（義）

我が家の猫から教わったこと

発達教育学部教授　鈴木依子

我が家の猫

我が家は夫と猫一匹の三人家族である。猫は「すず」という名前で、今年で十歳になる。人間ならば高齢者である。しかしながら、未だに、赤ちゃんのように振る舞い、私たち夫婦にとっては、かけがえのない存在である。私は、このすずと一緒に暮らし始めてから、色々なことを学んだような気がする。

すずは、背中にドット模様のあるオシキャットという種類で、女の子である。

彼女が我が家にやってきた理由は、先代の猫が亡くなり、夫がペットロスになりかけたのでお迎えしたのだ。

夫が、オシキャットにこだわったので、ペットショップを探し回った結果、広いケージの片隅で、ペルシャ猫の赤ちゃんにふんずけられて、ぺしゃんこになっていた、小さな小さな、すずを見つけたのである。

ペットショップですずを授かったとき、店員さんが、記念撮影をしてくれた。その店員さんが、すずに向かって、「せめて、少しでもかわいくしましょうね。」と話しかけているのを見て、ふと、私たちは物好きな夫婦だと思われているのではないかと感じた。

オシキャットは散歩のできる知能指数の高い猫ということで、そのころ、肥満気味であった夫は、一緒に散歩をすることで、スリムになろうと考えていたようだ。しかしながら、結果としては惨敗であった。すずは、まったく散歩に関心がなく、ハーネスをつけようとすると、一目散にどこかに隠れてしまうのである。結局、今では、立派に成長して七キロの巨体（普通、女の子は二～三キロ程度）を揺らして家中をパトロールしながら歩いている。

我が家に来客があると、皆、一様に、「毛艶がいい」とほめてくださるが、決して、「かわいい」とはいってもらえず、夫がひとり、毎日、「かわいいね。かわいいね。」と溺愛している。

我が家の困った猫

すずは、普段、寝室で一緒に眠っているのだが、何か気に入らないことがあると、私たちの目を盗んで、お布団の上をトイレ代わりにするのである。きっと、お布団がふかふかで気持ちが良いのかもしれないが、おかげで、冬は羽毛布団を何枚もダメにすることとなった。先代の猫は、とても賢かったので、本当にびっくりだった。

しかし、いつかは、治るのではないかと期待した。特に夫の期待は大きかったと思う。すずを溺愛する夫は、すずに過剰な期待をかけて育てていた。そこで、夫は、すずが寝室をトイレ代わりにしてしまうと、しつけと称して、「すずー！」と大きな声で怒るのだが、そうすると、ますます反応して、今度は、失禁してしまい、私たちは、後始末に大わらわとなる。そして、すずは、しばらくの間、「廊下生活」なる環境を体験する。この「廊下生活」とは、自宅のすべての部屋が立ち入り禁止となり、すずの居場所は、三帖程度の廊下限定となることをいう。そこには、寝床とお水とごはんがおかれるのだ。だいたい、二泊三日程度のお仕置きである。夫は、反省してもらっているといっていたが、猫にこの理由が通じるとは思えなかった。この繰り返しを数年間継続することとなった。

我が家の困っている猫

猫に学習してもらうより、私たちが学習すべきだったが、夫は最初、どうしても、何とかすずを自分の思い描く猫に教育したかったようだ。私はといえば、見守るというより、見て見ぬふりをしているだけだった。我が家での、すずの親権は夫にあることをいい事に、完全に第三者を装っていたように思う。夫の子なんだから、手出しはしないという前提で、夫が好きなようにするのをただ見守っていただけだった。

そして、私も、無意識ではあるが、賢かった先代の猫と比較していたように思う。猫にも皆それぞれに個性があるわけで、頭では理解していても、なかなか実践が伴わない典型のように、私たちは育て方を間違っていた。

子どもは親の思い通りにならないように、猫だって思い通りにはならない。そんなことわかっているはずだが、やはり、「こうあってほしい、こうあるべきだ」と、思っている自分たちがいた。まさに、すずは「困っている子」だった。

我が家の猫から教わったこと

私たちは、困っているすずのために、すずの周りの環境を整えることで、快適な生活を送ることができるようにするべきだったのだ。寝室にすずが一匹で入らないようにすべきだった。それを夫婦で怠っておきながら、すずを責めるのは間違っていた。

夫は、すずを教育するという名のもとに叱っていただけであり、すずは、怖がり、そして、怒りを爆発させただけで、何も良い効果は生まれなかった。私は、夫にうまく、そのことを伝えるべきだったが、できないでいた。

今思うと、夫の努力をまずは、評価すべきだった。しかしながら、私の口から出る言葉は、「またやっちゃったの。困った子ねー。」というマイナスな言葉だった。夫は、私の言動を自分の育て方への批判と受け取っていたように思う。そして、すずをも全否定されたと思っていたのだろう。

ある時、ふと、夫にべったりと抱かれているすずをみながら、「あなたは本当にすずのことをかわいがっているし、すずもあなたを信頼しているね」「こんなにいい子に育ったのはあなたのおかげだね」「猫にもいろいろな子がいるし、すずはすずなんだから、今のこの子のいいところを認めることが大切だね」といったところ、夫は「そうだね」とすんなりと同意してくれた。そして、「お粗相は治らないけど、すずがお粗相をしないためには、僕たちがすずが寝室に入らないように気を付けよう」と自ら提案してくれた。

ちょっと驚いたが、夫も怒ることが良いことではないことに気が付いていたのかもしれない。

私自身も、それまで、夫の労をねぎらうことがなかったことに気づき、大いに反省した。

それから、寝室には、私たちと一緒にいるときしか、すずが入らないように、寝室のドアは閉めておくように気を付けることとした。ただ、やはり、油断すると、いつの間にか、寝室に入り、一匹ですやすやと眠っている。

共に生活課題に取組むことの大切さ

私は、ソーシャルワークで対人援助を学生に教えている。ソーシャルワーカーは、人と環境の交互作用に介入し、クライエントとともに彼らの抱えている生活課題に取組むことで、生活の質の向上を目指すことを目標としている。

クライエントとかかわるとき、まず、その人を受け入れ、否定しないことが、信頼関係形成の第一歩である。そのためには、相手に対して敬意を表し、心から関心を示す態度が必要である。すずは、まさに困った子ではなく、困っている子だった。だから、その子に寄り添い、その子とともに、困りごとに取り組むことが大切なのだ。しかし、私たちの取り組み方は、「ともに」ではなく、上から目線の「指導」だったというしかない。

そして私は、夫に対しても同様に、信頼関係の形成のためのかかわりを怠っていたことを痛感した。家族に対しては、黙っていてもお互いに理解できると、つい甘えが出てしまうが、やはり、相手を尊重して、その想いを受け止めることは大切なことだ。

ありのままを受け入れることは、とても難しいことだが、お互いの信頼関係があれば乗り越えることができる。すべてはそこから始まるということを我が家の猫から教わったように思う。

法のことば

無意味なことばで　つづられた
千万言の　詩よりも
こころしずまる　一言が
はるかに　とうとく美しい

（「ダンマパダ」一〇一　京都女子大学『聖典』一〇七頁）

仏教の思想には、言葉というものについて、いっけん相反するような二つの見方が示されているよう見受けられます。一方で言葉は、迷いの生存をもたらすものです。私たちは言葉により世界を切り分け、その結果、物事にとらわれ執着し、そしてあれこれと思い悩み、苦しみます。しかし一方で、そうしたとらわれを超えて目覚めへと向かう道もまた、言葉によって開かれるのです。言葉という営みと深く結びついた私たちの生の丸ごとをとらえた仏教ならではの洞察であるという気がします。

仏典のなかの「こころしずまる一言」は、私たちの人生を照らしてくれます。仏教について学ぶ皆さんに、そうした言葉に出会っていただきたいと、そんなふうに願っています。（藤井　隆道）

芬陀利華アンケート

読んだ感想やコメントをお寄せください。
（すぐに答えられるアンケートです）

仏典随想　『プラ・マーライ経』

打本和音

本経は、マーライ尊者なる有徳の僧が、神通力で地獄や天界を旅する物語。元ネタはスリランカの仏教説話集にありますが、様々にアレンジされ、タイ、ミャンマー、カンボジア、ラオスなど、上座部仏教圏を中心に流布しました。日本では全くの無名ですが、東南アジアではメジャーな部類のお経です。

地獄に赴いたマーライ尊者は、おどろおどろしい情景を目の当たりにします。地獄に堕ちた者たちから地上の人間への注意や警告をもらった尊者は、次に天界に向かいます。忉利天という天界に至ると、そこには釈尊の髪の毛を祀った塔がたてられており、天人たちがお参りにきていました。「彼らはどんな善い行いをして天人に生まれ変われたのでしょう？」と、彼らの前世の行いを忉利天の主・帝釈天に教えてもらっていると、未来仏・弥勒もやってきます。弥勒に「地上の人たちは如何？」と問いかけられた尊者は、人間たちの行いについて割と辛口な批評を展開。すると弥勒は地上の人間へと前向きなコメントをくれました。地上に戻ったマーライ尊者は、人間たちに地獄と天界のそれぞれのあり様と、やがて現れる未来仏について語りました――。

マーライ尊者の冒険譚は、こんなことをしたら地獄行きだよ、こうすれば天界に行ける、善なる行いを積み重ねていれば未来に弥勒仏にであえるよ、と、人々に訴えかける役目を帯びていたようです。婚礼や葬儀など、それまでの生き方を振り返りたくなるような場で読み継がれ、人々に道徳観を説くものとして位置づけられていました。よく知られた経典であったためか、経文の左右に地獄や天界の様子を描いた絵本のような経典や、空間全体で地獄の様相を示すような寺院、さらには演劇スタイルにアレンジした例などもしられます。本経のあり方からは、人々と仏教の距離の様相が見えてきます。

シリーズ　智慧の蔵㊽

『明治洋食事始め　とんかつの誕生』

岡田　哲　著　講談社学術文庫　二〇一二年

「とんかつの誕生」という心惹かれる副題が付けられた本書は、誰にとっても身近な「食」についての近代化を扱っています。明治期に入り西欧文化と接触したことで、日本人の食卓にも大きな変化が生じました。

私は近代の仏教について研究していますが、仏教と食の近代化には、特にその経緯において共通点が見られます。どちらも、当初は否応なしの西欧からの影響に右往左往しつつも、徐々に日本的な形式に合うように消化していき、最終的に独自の形態を持つに至りました。西欧文化の衝撃は広範にわたったため、この一連の流れは仏教や食に限らず、さまざまな分野で見られたのではないかと思います。

さて近代日本の食における最大の変化といえば、肉食が取り入れられたことです。日本では千二百年もの間、獣肉は忌避され、米飯、野菜、魚介中心の食事がなされてきました。しかし当時、日本人と西欧人との体格差は明らかで、それに対する劣等感を拭い去り、西欧諸国と対等に渡り合うためにも、肉食の導入は必須とされます。明治天皇が率先して肉食する姿を見せ、政府や知識人による上からの肉食奨励が盛んにおこなわれました。

とはいえ長年染みついた獣肉への忌避感は、そう簡単になくなるものではありません。ここから、庶民による下からの肉食導入の試みが始まります。牛鍋やすき焼きはその最初期の成功例です。肉を食べるにあたって、ステーキのような厚切りではなく薄切りで、味付けはバターでなく醤油と砂糖で、ナイフやフォークでなく箸で、というように、和食の中に西洋の素材を取り込んだのでした。人々は徐々に肉食に馴染んでいき、ついにはとんかつという日本独自の和洋折衷料理を生み出していくことになります。

もちろんこうした歴史に紆余曲折はつきものです。真剣だからこその滑稽さもあります。「カレーの味噌汁」、「牛乳入りマグロ山かけ」、といわれてもその味は想像すらできませんが、なんでもやってやろうというあふれんばかりの意欲にむしろ圧倒されます。

現代の私たちの食卓を考えるとき、その起源が近代にあるメニューは決して少なくありません。自らの食文化のルーツを知り、また近代の人々の知恵とエネルギーを感じるという意味でも、ぜひご一読いただければと思います。（川元　恵史）